

平成 27 年度第 13 回講演会 記録

日 時	平成 27 年 10 月 24 日 10:00~13:00 (注) 講師都合により時刻変更。		
会 場	此花会館 梅香殿		
講 師	九州大学大学院農学研究院 准教授 望岡 典隆 先生		
演 題	ニホンウナギの生態と資源回復の道		
備 考	参加者数 131 名 (注)	記録	飯田 正恒

1. はじめに

冒頭、田中先生から、「ウナギ研究の第一人者であり、生態のみならず、どうすれば増やせるかの研究をされている」と望岡先生を紹介された。望岡先生は自己紹介で、高校教科書で学んだ内田恵太郎先生の著「稚魚を求めて」に触発されて魚類学を学び、後年憧れの九州大学・内田先生のもとで研究生活をスタートされたとのこと。本題では次の 6 項目を、豊富な写真や図版をパワーポイントを使用し解説された。



① ウナギとはどのような生き物か ②ウナギ資源の現状 ③ウナギ産卵場所

探索航海記④ 産卵場で捕獲した親ウナギから得られた知見 ⑤シラスウナギの来遊 ⑥資源回復の道

2. 講演要旨：講演レジュメ参照

3. 講演を聞いて



- (1) 日本人にとって身近な魚であり、親しまれてきたニホンウナギの漁獲量が近年激減し、1960~70 年当時と比べおよそ 1/10 になってしまい、2013 年に環境省レッドリストに絶滅危惧 I B (EN) に掲載された。ヨーロッパウナギについては、1990 年代に稚魚を中国で養殖し日本へ輸出する販路が定着し、輸出が本格化すると資源は激減した。稚魚の乱獲が主な原因と指摘されている。いずれも日本がウナギの最大消費国であることが背景にあるとのこと。
- (2) 1991 年にニホンウナギの産卵場所がマリアナ海域であることを突き止めたことで、デンマークの海洋学者ヨハネス・シュミット (1877-1933) の研究 (1922 年、大西洋 2 種の産卵場所がサルガッソウ海にあることを突き止めた) によりやく追いついたこと。広い太平洋のなかでその場所を突き止めるまで当て外れの連続の中で決してあきらめず、試料の採取、検鏡、親魚の捕獲、耳石の分析など地味な作業を場所を変えながら得た大きな成果であるが、この分野の研究の大変さを感じた次第である。
- (3) 2010 年にニホンウナギの完全養殖技術に成功したとはいえ、現在ウナギの種苗は 100%天然のシラスに頼っており、そのシラスウナギ (1kg ≒ 5000 匹 300~500 万円とのこと) の捕獲量は 1960 年代の 200 トンが最近では 10 トン以下になり養鰻業に深刻な打撃。減少要因に「河川や沿岸域など、成長期の個体の生息場所の減少と劣化」があり、その具体的な説明があったが、まさに「森里海連環」の世界の中にウナギもいることを改めて認識した。
- (4) 養殖ウナギは外来種の養殖が急増とのこと、これらが天然水系へ散逸したり放流することがない体制がどのようにとられているか、気に掛るところであった。

4. 所感

日本の食文化上大切なウナギを後世の人達も楽しめるよう、ウナギ个体群の回復を望岡先生の研究に期待すると同時に、私たちにできる資源回復の道を考えてみたい。

